

## 『源氏物語』と与謝野晶子

——「源氏物語礼讃」歌をめぐって——

西田 禎 元

近代短歌史上に燦然と光り輝いている明星与謝野晶子は、『源氏物語』をはじめとした日本の古典文学に対する造詣の深さでも有名である。

明治三十七年十一月に発表された「ひらきぶみ」には次のような記述が見られる。

九つより栄華や源氏手にのみ致し候少女は、大きく成りてもますく、王朝の御代なつかしく

「栄華」は『栄花物語』で、「源氏」は『源氏物語』のことである。

堺女学校に転校した十歳の頃から、ますます古典や歴史書に親しんでいる。

晶子が本格的に『源氏物語』にかかわるようになったの

は、明治四十年二十九歳の時からであろう。

その年の六月に〈閨秀文学会〉が発足し、そこで『源氏物語』の講義を担当することになった。

二年後には自宅で夫の寛とともに、有料の『万葉集』（寛担当）と『源氏物語』（晶子担当）の講義を始めた。

生涯にわたって深い親交で結ばれた小林政治氏から、『源氏物語』注釈の依頼があったのは、丁度その年であった。これが三年後（明治四十五年）の『新訳源氏物語』の刊行につながる。

森鷗外と上田敏の序文を冠した『新訳』であったが、晶子自身の回想によれば「粗雑な解と訳文」（与謝野晶子訳『源氏物語』下巻〈河出書房、昭和四十二年〉「あとがき」）の産物であった。

『新訳』を全面的に補う改訳が、二十七年後に完成した『新

新訳源氏物語』である。前記の河出書房版も『新新訳』の漢字の字体や仮名遣いを改めたものである。

晶子は作者である紫式部についても関心が深く、次のような随想・論評を公にしている。

- (1) 紫式部の事ども (大正四年十一月)
- (2) 紫式部と其時代 (同前)
- (3) 紫式部考 (大正五年)
- (4) 紫式部の伝記に関する私の発見 (大正六年五月)
- (5) 紫式部の貞操に就て (大正六年九月)
- (6) 紫式部新考 (昭和三年一月)

これらの中で、(6)の論評は、学術論文集にも収められるほどの力作である。この論評の特色は、『源氏物語』作者二人説で、前篇(桐壺から藤裏葉)の作者を紫式部、後篇(若葉上から夢浮橋)の作者を大式三位としている。

ともあれ、本稿では、「源氏物語礼讃」と題された五十首の歌を通して、晶子における『源氏物語』受容の一面を垣間見ることにしたい。

さて、礼讃五十四首が発表されたのは、大正十一年の一月、第二次『明星』第一巻第三号である。

M・R氏の巻頭文に次いで晶子の礼讃歌が掲載されている。三頁から八頁までの六頁分に、各頁十首ずつ(初めと終わりは七首ずつ)印刷されている。

これらの歌は、次男の秀氏の思い出によれば、大正七八年頃に、中央公論社の滝田樗陰氏が屏風を持参し書いて貰った歌群が原形であるという。

五十四頁は『源氏物語』五十四帖の一帖毎に一首ずつ詠んだ体裁になっている。

以下「桐壺」から「夢浮橋」に至る五十四首について順次見ていくことにするが、今回は紙幅の関係で、晶子の唱える前篇にとどめたい。

#### 〔桐壺〕

紫の輝く花と日の光おもひ合はではあらじとぞ思ふ

輝く日の宮(藤壺宮)と光る君(光源氏)を並べ、二人の相聞譚の主題を詠んだ歌である。

物語には次のような記述が見られる。

なほにほはしきはたとへむ方なく、うつくしげなるを

世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おほえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。(日本古典文学全集〈小学館〉『源氏物語』〇二二〇ペ)

藤壺宮は先帝の内親王で、源氏の亡き母桐壺更衣に似て

いた。更衣に死なれた桐壺帝が後宮の藤壺（飛香舎）に住まわせた女御である。

源氏は母の面差しをたたえる宮を慕い、やがて二人は結ばれる。「若紫」の巻に語られる二人の密通は、宮の懐妊という事態を生み、二人は愛恋の悲劇を生きる。

初句「紫の」は、藤の花（藤壺）の色であると同時に、〈紫のゆかり〉を意味するキーフレーズである。総序に相当する歌であるともいえる。

〔帚木〕

中川の皐月の水に人似たり語ればむせび寄ればわなな  
く

〈雨夜の品定め〉の翌日、御所から妻葵上の実家に退出した源氏は、あいにくの〈方塞がり〉のために、中川にある紀伊守の邸宅に〈方違へ〉をする。

折りしも、紀伊守の父伊予介の後妻である空蟬が来訪しており、源氏は彼女の寝所に忍ぶ。

語り寄る源氏を拒みながらも、空蟬は結局源氏を受け入れてしまう。

物語は次のように記される。

まことに心やましくて、あながちなる御心ばへを、言ふかたなしと思ひて、泣くさまなどいとあはれなり。心苦しくはあれど、見ざらましかばと口惜しからましと思す。（〇一七八へ）

〔空蟬〕

うつせみの我が薄ごろも風流男に馴れて寝るやとあぢ  
きなき頃

再び源氏が寝所に忍ぶのを知った空蟬は、単衣の上に着ていた薄衣を脱ぎすべらし、寝所を抜け出す。

その薄衣を持ち帰った源氏は、衣を手空蟬を偲ぶのである。「風流男」はもちろん源氏である。

物語は次のように記される。

かの薄衣は小袿のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴られて見あたまへり。〈中略〉かのもぬけを、いかに伊勢をのあまのしほなれてやなど、思ふもただならず、いとよろづに思ひ乱れたり。（〇二〇四へ）

〔夕顔〕

憂き夜の悪夢とともになつかしき夢も跡なく消えにけ

るかな

五条に住む女君夕顔と親しくなった源氏は、〈なにがし院〉なる別荘に彼女を伴う。一日語り合ったその夜、〈物の怪〉のために彼女は急死する。

「憂き夜の悪夢」とは源氏の枕上に立った「女」の夢であり、「なつかしき夢」は夕顔との思い出である。

物語は次のように記される。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女みて、「おのが、いとめでたしと見たてまつるをば、尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして、時めかしたるこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。〈中略〉ややとおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。(〇三三八〜四一ぺ)

枕上に立った「女」の訴えから、これは六条御息所であることがわかる。彼女は故皇太子の妃であったが、この当時は源氏の愛人である。

晶子歌結句の「消えにけるかな」は、〈物の怪〉も〈夕

顔との思い出〉も〈夕顔の命〉もすべて亡くなってしまった意である。

〔若紫〕

春の野のうらわか草に親みていとおほどかに恋もなりぬる

春の北山で初恋の人(藤壺宮)に似た若草の少女(若紫)と出会った源氏の恋は、ようやく落ち着きを見せるようになった。

この少女こそ、物語全体のヒロインである〈紫上〉で、彼女の父親と藤壺宮は兄妹であった。

物語は次のように記される。

手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草(〇三一四ぺ)

「紫」は藤壺宮のことであり、〈紫のゆかり〉の主題を導く記述になっている。

〔末摘花〕

革ごろも上に着たれば我妹子は聞くことの皆身に沁ま

ぬらし

「革ごろも」は黒貂の皮衣のことで、「我妹子」は〈末摘花〉の女君をさす。彼女は源氏の問いかけに応答できないのである。

普賢菩薩の乗り物である白象の鼻にもたとえられる末摘花の紅花に触れないところは、晶子の思いやりであろうか。物語は次のように記述される。

①年ごろ思ひわたるさまなど、いとよくのたまひつづくれど、まして近き御答へは絶えてなし。(〇二五六ペ)

②表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。〈中略〉若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。(〇二六七ペ)

①は晶子歌の第三句から結句に相当し、②は初句・第二句に相当している。

〔紅葉賀〕

青海の波しづかなるさまを舞ふ若き心は下に鳴れども

桐壺帝の行幸を前にした清涼殿での試楽の際に、源氏は『青海波』（雅楽の一種）を舞う。帝の傍には藤壺宮も同席していた。

翌朝、源氏は宮に対する苦しい恋の思いを歌に託した。物語は次のように記される。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うちふりし心  
知りきや (〇三八五ペ)

その時期既に宮の胎内には源氏の子が宿っていた。

〔花宴〕

春の夜の靄に酔ひたる月ならん手枕かしぬわが仮臥に

御所の南殿（紫宸殿）で催された桜花の宴の夜、源氏は右大臣の六君（弘徽殿女御の妹）を知る。臈にかすむ春月を思わせる女君であった。弘徽殿の細殿（細長い廂の間）で二人は夜明けまで過ごす。

物語は次のように記される。

月いと明かうさし出でてをかしきを、源氏の君酔ひ心  
地に、〈中略〉弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、

〔中略〕いと若うをかしげなる声の、なべての人とは  
聞こえぬ、「朧月夜に似るものぞなき」と、うち誦じて、  
こなたさまには来るものか。いとうれしくて、ふと袖  
をとらへたまふ。(〇四二五―六ペ)

〔葵〕

恨めしと人を目におくことも是れ身の衰へに外ならぬ  
かな

〔物の怪〕に苦しめられながらも、妻の葵上が無事に男  
子を出産し、心安らいだ源氏は、父桐壺院に報告すべく家  
を後にする。夫を見送る葵上の執着は、産後の体調の不安  
や生命の衰えがもたらしたものである。

物語は次のように記される。

いたう弱りそこなはれて、あるかなきかの気色にて臥  
したまへるさま、いとらうたげに、心若しげなり。〔中略〕  
いときよげにてうち装束きて出でたまふを、常よりは  
目とどめて見出して臥したまへり。(〇三八―九ペ)

〔榊〕

五十鈴川神のさかひへ逃れきぬ思ひ上りし人の身のは

て

「神のさかひ」は伊勢神宮をさし、「思ひ上りし人」は六  
条御息所をさす。「五十鈴川」は神宮前を流れる川の名で  
ある。

ところで、御息所の「思ひ上り」とは何であったのか。

東宮妃であったということなのか、それとも、源氏の愛を  
一人占めにしていたかったとでもいうのであろうか。

そのような境遇よりは、彼女のプライドの高さのことで  
あろう。そうした自負心が、ともすると源氏の心を遠ざけ、  
時には抑制の反動で怨霊と化すのであろう。

物語は次のように記される。

御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限  
りなき筋に思し心ざして、いつきたてまつりたまひし  
ありさま変りて、末の世に内裏を見たまふにも、もの  
のみ尽きせずあはれに思さる。〔中略〕鈴鹿川八十瀬  
の浪にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせず(〇八五  
―七ペ)

〔花散里〕

橘も恋の愁ひも散りかへば香をなつかしみ杜鵑鳴く

「恋の愁ひ」は藤壺宮や朧月夜君との恋の物思いである。宮は義母であり、女君は敵対する陣營の娘であり、しかも女君との密会は既に露顕していた。

初句・第四句・結句は、物語本文の源氏歌に類似した表現になっている。

物語は次のように記される。

- ①人知れぬ御心づからのもの思はしきは何時となきこと  
なめれど、〈中略〉さすがなること多かり。(〇一四五  
ペ)
- ②橘の香をなつかしみほととぎす花散る里をたづねてぞ  
とふ(〇一四八〜九ペ)

〔須磨〕

人恋ふる涙と忘れ大海へ引かれ行くべき身かと思ひぬ

「人恋ふる涙」は、都人と別れ須磨に下る源氏の人恋しい思いの涙であろうが、「忘れ」とは、いかなる悲しみの表現なのであろうか。

「須磨」の巻前半の主題は離別の悲しみであるが、その最たるものは、愛妻紫上との惜別の情である。源氏の須磨

退居を知らされた時から、彼女は悲嘆に暮れ泣いている。そうした人恋しい涙の悲しみをあえて忘れようとしての旅であるというのか。

別れの挨拶まわりや消息のやりとりの際に泣いていた人たちは、④左大臣家(故葵上実家)の人たち、⑤東宮(後の冷泉帝)御所の人たち、⑥紫上、⑦朧月夜君などである。

④については、老左大臣をはじめ夕霧付きの乳母や侍女たち、かつて葵上に仕えていた中将君(源氏の愛人)や大宮(葵上の母)が泣いていた。

⑤については、「二宮の内忍びて泣きあへり」(〇一七五ペ)の記述から、皆人が泣いていたと思われる。

⑥については、前述のとおり泣き暮らしており、「涙を一目浮けて」(〇一六五ペ)とか、「涙を紛らはしたまへる」(同前)のように、「涙」の記述が見られる。

⑦については、須磨退居の引き金ともなった相手であり、会うことは許されず消息を交わし泣き乱れる。

源氏もまた、大宮の消息に対し、藤壺宮との対面や故桐壺院の陵墓において泣いている。

思えばこれらの三人は源氏にとって〈おや〉なのである。大宮は妻の母、藤壺宮は継母、故院は実父である。母桐壺更衣を三歳で失った源氏は、悲しみやつらさを包み込んでくれる母性の実感に乏しい。その母親に代わるべき存在が

彼ら三人であり、三人の愛情に包まれ、或は包まれた往時を思い、心の緊張がとけたのであろう。

ともあれ、「人恋ふる涙」の表現は、紫上との別れを主題にした表現と解してよい。

第三句以下は、須磨浦流離の表現である。

物語は次のように記される。

道すがら面影につとそひて、胸も塞がりながら、御舟に乗りたまひぬ。(〇一七八へ)

#### 〔明石〕

わりなくも別れがたしと白玉の涙を流す琴の絃かな

源氏赦免の宣旨が下り、帰京の二日前に源氏は明石君を訪ねた。

源氏の子を身ごもっている彼女は、別れの涙にむせびながら、悲しみを琴の音に託す。

物語は次のように記される。

みづからもいとど涙さへそそのかさされて、とどむべき方なきに、〔中略〕忍びやかに調べたるほどいと上衆めきたり。〔中略〕ただ別れむほどのわりなさを思ひ

むせたるも、いとことわりなり。(〇二五五―六へ)

#### 〔濔標〕

みをつくし逢はんと祈る幣帛もわれのみ神に奉るらん

住吉神社に詣でて、源氏との再会を「みをつくし」て「祈る」のも、「幣帛」を「神に奉る」のも明石君である。

物語は次のように記される。

数ならでなにはのこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ〔中略〕またの日ぞよろしかりければ、幣帛奉る。ほどにつけたる願どもなど、かつがつはたしける。(〇二九七―八へ)

#### 〔蓬生〕

道もなき蓬を分けて君ぞ来し誰にも勝る身の心地する

上の句は、源氏が十年ぶりに末摘花を訪問したことを詠い、下の句は、源氏の来訪による彼女の僥倖を詠っている。

物語は次のように記される。

①たづねてもわれこそとはめ道もなく深きよもぎのもと



のころを（中略）姫君は、さりともと、待ち過ぐし  
たまへる心もしるくうれしけれど、いと恥づかしき御  
ありさまにて対面せんもいとつつましく思したり。

（〇三三八―九ペ）

②御文いとこまやかに書きたまひて、二条院近き所を造  
らせたまふを、（中略）女ばらも空を仰ぎてなむ、そ  
なたに向きてよろこびきこえける。（〇三四三―四ペ）

こうして末摘花は、源氏の庇護のもとに二条東院に移り  
住むのである。

〔関屋〕

逢坂は関の清水も恋人の熱き涙もながるるところ

（帚木）とも（空蟬）とも呼ばれた女性は、夫の常陸介（か  
つての伊予介）と上京し、逢坂の関で石山詣での源氏一行  
と出会う。

「恋人」は源氏が恋いした人（空蟬）のことである。

物語は次のように記される。

女も、人知れぬ昔の事忘れねば、とり返してものあは  
れなり。

行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人  
は見るらむ（〇三五―一ペ）

〔絵合〕

逢ひがたき斎の女王と思ひにき更にはるかになり行く  
ものを

「斎の女王」は斎宮として伊勢神宮に仕えていた六条御  
息所の娘のことである。その神に仕えていた女性を、源氏  
は御息所の遺言により養女として後見する。そして彼女は、  
冷泉帝（源氏と藤壺宮との子）の後宮（梅壺）に入内する。

この歌は、かつて伊勢下向の折りに（別れの櫛）を挿し  
てやった朱雀院（前の帝）の思いを詠んだものである。

かつては「逢ひがたき」（斎垣）の女性であった彼女は、  
今では冷泉帝の（梅壺女御）という、「更にはるか」な存  
在になつてしまつたのである。

物語は次のように記される。

わかれ路に添へし小櫛をかごとにてはるけきなかと神  
やいさめし（中略）別るとてはるかにいひしひとこと  
もかへりてものは今ぞかなしき（〇三六〇―二ペ）

〔松風〕

あぢきなき松の風かな泣けば泣き小琴をとれば同じ音を弾く

源氏からの招請で娘と母を伴い上京した明石君は、嵯峨野の大堰河畔の邸宅に住む。源氏の来訪を待ちわび、父入道が住む故郷の家を恋い慕いつつ琴を手にする。

「小琴」は明石の浦を去る時に、源氏が形見の品として明石君に託した〈琴（きん）〉である。

物語は次のように記される。

なかなかもの思ひつづけられて、捨てし家も恋しうつれづれなれば、かの御形見の琴を掻き鳴らす。〈中略〉

松風はしたなく響きあひたり。 (〇三九七―八ペ)

〔薄雲〕

桜ちる春の夕のうす雲の涙となりておつる心地に

思い出の人藤壺宮が崩御し、源氏は涙に沈む。「桜ちる」は行く春の季節の表現であるばかりでなく、宮の崩御をも意味している。「春の夕のうす雲」を悲しみの涙の色であると、源氏は思う。

物語は次のように記される。

をさめたてまつるにも、世の中響きて悲しと思はぬ人なし。〈中略〉ものの栄なき春の暮なり。二条院の御前の桜を御覧じて、〈中略〉日一日泣き暮らしたまふ。夕日はなやかにさして、〈中略〉雲の薄くわたれるが鈍色なるを、〈中略〉いとものあはれに思さる。 (〇四三八ペ)

「燈火などの消え入るやうに」 (〇四三七ペ) 亡くなった

藤壺宮の死を、散る桜の景に追懐する晶子の歌は、

木の間なる染井吉野の白ほどのはかなき命抱く春かな

〔白桜集〕

と、自分の命を白桜に重ね見た思いにつながる。

〔朝顔〕

自らをあるか無きかの朝顔と云ひなす人の忘れぬかな

桃園式部卿宮の姫君〈朝顔〉 (源氏の従妹) は、源氏の求愛を拒み続けた女性である。

桐壺帝崩御の折りに、帝の第三皇女であった齋院 (賀茂

神社に仕える)が退き、代わって齋院に立ち、父宮が亡くなるまでの九年間にわたって神に仕えるという、女盛りの人生を齋垣の中で過ごさなければならなかった、気の毒な運命の女性でもあった。

源氏の執心は変わらない。物語は次のように記される。

朝顔のこれかれに這ひまつはれて、あるかなきかに咲きて、にほひもことに変れるを、折らせたまひて奉れたまふ。(中略)

秋はてて霧のまがきにむすほれあるかなきかにうつる朝顔

似つかはしき御よそへにつけても、露けく(中略)えやむまじく思さるれば、さらがへりてまめやかに聞こえたまふ。(四六六―七)

### 〔乙女〕

雁鳴くや列を離れて唯だ一つ初恋をする少年の如

〈雲居雁〉の呼び名をもつ少女(頭中将の娘)と十二歳の大学子科生である夕霧(源氏と葵上との息子)との初恋を詠んだ歌である。

「列を離れて唯だ一つ」は、二人の仲が一時さかれたこ

とを意味していよう。

物語は次のように記される。

いとど文なども通はんことのかたきなめりと思ふに、いとなげかし。(中略)雁の鳴きわたる声のほのかに聞こゆるに、(中略)「雲居の雁もわがごとや」と、独りごちたまふ(四二二)

### 〔玉鬘〕

火の国に生ひ出でたれば云ふことの皆恥しく頬の染ま

るわれ  
筑紫から肥前へと、九州は火の国で成長した(玉鬘) (頭中将と夕顔の娘)は、肥後の豪族大夫監の求婚から逃れるべく、乳母や乳母子ら(豊後介・兵部君)に見守られ上京する。

別れた母親との再会を祈願すべく参詣した初瀬で、彼女は母の侍女であった右近に巡り会う。右近の報告を聞いた源氏の配慮で、彼女は六条院の東の町に住む(花散里)に領けられる。

右近や源氏との対面の際、鄙びた我が身を恥ずかしく思う玉鬘である。

物語は次のように記される。

のことである。

①二十ばかりになりたまふままに、生ひととのほりて、いとあたらしくめでたし。この住む所は、肥前国とぞいひける。(◎八七ペ)

②姫君の、いたくやつれたまへる恥づかしげに思したるさま、いとめでたく見ゆ。(◎一〇七ペ)

③いとこよなく田舎びたらむものを、と恥づかしく思いたり。(◎一一八ペ)

④几帳すこし押しやりたまふ。わりなく恥づかしければ、側みておはする様体など、いとめやすく見ゆれば、うれしくて(◎一二三〜四ペ)

### 〔初音〕

若やかに鶯ぞ鳴く初春の衣配られし一人のごとく

明石君母娘の贈答歌や、新春の贈り物に扱った一・二句であるが、鶯は実際には鳴いていない。『枕草子』の「鳥は」の段が思いやられる。

鶯によそえられた明石姫君の返歌が「初音」であり、その実現を「鳴く」と詠んだのである。

三〜五句は、源氏から女君たちへ贈られた年賀の晴れ着

紫上には紅梅が浮き模様になっている葡萄染の小袿と流行色のお召し物、明石姫君には桜の細長とつややかな搔練、花散里には浅縹色の海賦模様の織物の衣装と濃き紅の搔練、玉鬘には真つ赤な表着と山吹色の細長、末摘花には柳織に唐草の乱れ模様の衣装、明石君には梅の折枝と蝶・鳥が飛び交っている模様の唐風の小袿と濃紫色の衣装、空蟬の尼君には青鈍色の織物と梔色の衣装と薄紅の衣装が、それぞれ配られたのである。

### 〔胡蝶〕

盛りなる御代の后に金の蝶しろがねの鳥花たてまつる

「盛りなる御代の后」とは冷泉帝の后（秋好中宮）（六条御息所の娘）のことである。彼女が主催する春の御読経（四日間紫宸殿において百僧に大般若経を講じさせる）の際に、紫上の御供養の志として、蝶と鳥の舞装束を身につけた八人の童女が持参する、黄金の花瓶にさした山吹と、銀の花瓶にさした桜と、仏前にお供えする花とが届けられたことを、三〜五句で詠んでいる。

物語は次のように記される。

今日は、中宮の御読経のはじめなりけり。〔中略〕春の上の御心ざしに、仏に花奉らせたまふ。鳥蝶にさうざき分けたる童べ八人、〔中略〕鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。〔三〕一六三―四ペ)

〔螢〕

身に沁みて物を思へと夏の夜の螢ほのかに青引きて飛ぶ

「身に沁みて物を思」う主体は玉鬘であるう。彼女の物思いは、源氏の養女にならなければならなかつた運命に対する思いである。

源氏に庇護されながらも、一方で親らしからぬ懸想に対して彼女は悩む。それは、源氏の養女でなく、男と女の關係であつたならば、という思いにもつながるものであつた。

「ほのかに」以下は、卷名の由来でもあり、源氏の異母弟〔兵部卿宮〕が玉鬘を訪ねた折りに、彼女の姿を見せようとして夕方捕えておいた螢を、源氏が放つたことを詠っている。

物語は次のように記される。

① 対の姫君こそ、いとほしく、思ひの外なる思ひ添ひて、いかにせむと思し乱るめれ。〔中略〕母君のおはせずなりにける口惜しさも、またとり返し惜しく悲しくおぼゆ。〔三〕一八七ペ)

② さと光るもの、紙燭をさし出でたるかと、あきれたり。螢を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくるふやうにて。にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへる。〔三〕一九二ペ)

〔常夏〕

露置きてくれなゐいとど深けれど思ひ悩める撫子の花

「撫子」が玉鬘をさすことは、「帚木」の卷における母〔夕顔〕の歌以来明白であつた。

(ア) 山がつの垣ほ荒るともをりをりにあはれはかけよ撫子の露 (〇一五八ペ)

(イ) 幼き物などもありしに、思ひわづらひて撫子の花を折りておこせたりし (同前)

(ウ) かの撫子のらうたくはべりしかば、いかで尋ねむと思

ひたまふる (㊦一五九ペ)

その玉鬘が、源氏の養女として美しく輝いているが、その一方で義父源氏の恋慕に思い悩んでいるのである。

物語は次のように記される。

①撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつかしく結ひなして、咲き乱れたる夕映えいみじく見ゆ。

(㊦二二〇ペ)

②なでしこのとこなつかしき色を見ばもとの垣根を人やたづねむ (㊦二二三ペ)

②の「とこなつ」は卷名の由来であり、これもまた「帚木」の卷の夕顔につながる。

(エ)咲きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにし  
くものぞなき (㊦一五八〜九ペ)

(オ)うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり (㊦一五九ペ)

### 〔篝火〕

大きな檀の下に美しく篝火燃えて涼かぜぞ吹く

「篝火」は玉鬘に対する源氏の〈思ひ〉の〈火〉である。物語は次のように記される。

初風涼しく吹き出でて、〈中略〉御前の篝火のすこし消え方なるを、〈中略〉点しつけさせたまふ。いと涼しげなる遣水のほとりに、けしきことに広がり伏したる檀の木の下に、打松おどろおどろしからぬほどに置きて、さし退きて点したれば、御前の方はいと涼しくをかしきほどなる光に、女の御さま見るにかひあり。〈中略〉篝火にたちそふ恋の煙こそ世には絶えせぬほのほなりけれ (㊦二四八〜九ペ)

### 〔野分〕

けざやかにめでたき人ぞいましたる野分が開くる絵巻の奥に

「めでたき人」は紫上である。野分のいたずらで、ゆくりなくも夕霧は彼女の姿を垣間見ることができた。

「めでたき」という最高級の賞め言葉、「いましたる」という尊敬語表現、更には、「絵巻」という夢幻的物語舞台を設けて、その物語世界のヒロインである紫上の輝くばかり

りの美しい存在を、観客代表の夕霧の眼と心に映し詠っている。

物語は次のように記される。

中将の君参りたまひて、〈中略〉妻戸の開きたる隙を何心もなく見入れたまへるに、〈中略〉御屏風も、風のいたく吹きければ、押したたみ寄せたるに、見通しあらはなる廂の御座にゐたまへる人、ものに似るべくもあらず、気高くきよらに、さとにほふ心地して、春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す。〈中略〉愛敬はにほひ散りて、またなくめづらしき人の御さまなり。(㊦二五六―七ペ)

〔行幸〕

雪ちるや日より長くめでたさも上なき君の玉のおん輿  
「雪ちる」は冷泉帝の大原野行幸の日の天候、「上なき君」は冷泉帝、「玉のおん輿」は冷泉帝の乗り物のことである。  
物語は次のように記される。

その十二月に、大原野の行幸とて、世に残る人なく見騒ぐ〈中略〉雪ただいささかづつうち散りて、道の空

さへ艶なり。〈中略〉帝の、赤色の御衣奉りてうるはしう動きなき御かたはら目に、なずらひきこゆべき人なし。〈中略〉御輿の中よりほかに、目移るべくもあらず。(㊦二八一―三ペ)

見物人の中の玉鬘は、他の誰よりも立派な冷泉帝のありようを確認する。

〔藤袴〕

むらさきの藤袴をば見よと云ふ二人泣きたき心地覚え  
て

「むらさき」は藤袴の色であるとともに、玉鬘と夕霧が従姉弟という〈ゆかり〉であるという意味でもある。

藤袴は〈蘭〉の異名で、源氏の使いとして玉鬘を訪ねた夕霧が、この花を贈ったのである。

下の句は夕霧の思いであるが、煩わしさを感じた玉鬘は部屋の奥へ退く。

物語は次のように記される。

蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりさし入れて、「これも御覧すべきゆゑはあり

けり」とて、〈中略〉取りたまふ御袖ひき動かしたり。  
おなじ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかご  
とばかりも（㊦三三四ペ）

〔真木柱〕

恋しさも悲しきことも知らぬなり真木の柱にならまほ  
しけれ

「恋しさ」も「悲しきこと」も父の髭黒大将と別れる姫  
君の思いであり、前者は父恋しの思い、後者は離別の悲し  
みである。

「真木の柱」は檜材の柱のことであり、住み馴れていた  
家の東面に立っていた。

その〈真木の柱〉になりたいということは、人間の感情  
にはかかわりのない〈非情〉の存在でありたいというので  
あろうが、物語の方は少しく違っている。

物語は次のように記される。

常に寄りゐたまふ東面の柱を人にゆづる心地したまふ  
もあはれにて、姫君、〈中略〉今はとて宿離れぬとも  
馴れきつる真木の柱はわれを忘るな（㊦三六五ペ）

姫君は自分のことを（自分が柱とともに居たことを）忘  
れないでほしいと言っている。ということは、〈真木の柱〉  
が〈有情〉の存在であることを願っているのが、物語の方  
の歌である。

〔梅が枝〕

天地に春新しく来りけり光源氏のみむすめのため

「春新しく」は源氏二十九歳の新春が訪れた意と、新し  
い人生が開けゆくことを意味している。

新しい人生とは、「光源氏のみむすめ」の輝かしい未来  
への旅立ちのことである。その「みむすめ」は明石姫君で  
あり、彼女が東宮（朱雀院第一皇子）の妃として入内する  
ことを詠っているのであるが、入内の実現は初夏四月であ  
り、次の巻に記される。その予告の巻でもある。

物語は次のように記される。

御裳着のこと思しいそぐ御心おきて、世の常ならず。  
春宮も同じ二月に、御かうぶりのことあるべければ、  
やがて御参りもうちつづくべきにや。（㊦二九五ペ）

〔藤裏葉〕



藤ばなのもとの根ざしは知らねども思ひかはせる白と  
紫

「藤ばな」と「紫」は雲居雁を、「白」は夕霧をさす。

「根ざしは知らね」とは、雲居雁の幼少期からの恋が父親に認められなかったことを詠っているのである。その許されなかった夕霧と雲居雁の七年間にわたる思いを、晴れて交わすことができたのである。

物語は次のように記される。

紫にかごとはかけむ藤のはなまつよりすぎてうれたけれども  
（中略）いくかへり露けき春をすぐしきて花の  
ひもとくをりにあふらん（㊦四三〇一ぺ）

夕霧と雲居雁の結婚のあと、紫上と明石君の対面、明石姫君の東宮入内、源氏への准太上天皇位授与、冷泉帝の六条院行幸（朱雀院も参列）などが語られ、物語の第一部（晶子が説く前篇）は華やかに幕を閉じる。